

（@大邱）日韓関係を支える市民交流

2015年4月21日00時00分

シェア

0

ツイート

38

ブックマーク

1

スクラップ

メール

印刷

お気に入り連載



10日、韓国・大邱にある水崎林太郎の墓に献花する韓日親善交流協会の李東根会長（左）と別所浩郎・駐韓日本大使



■特派員レポート 貝瀬秋彦（ソウル支局長）

韓国南東部、大邱（テグ）の小高い丘にある水崎林太郎さんの墓には、春の柔らかな日差しが差していた。4月10日午前。墓前で故人をしのぶ追悼式が始まると、ゆかりの人たちが次々に花を捧げた。

日本が 朝鮮半島 を植民地支配していた1915年、岐阜県出身の水崎さんは開拓農民として大邱に入植。干ばつや洪水に悩む農民たちの姿を目の当たりにし、当時の朝鮮総督府などに掛け合っ^てて巨額の支出を引き出して、27年に貯水池「寿城（スソン）池」を完成させた。水崎さんは39年に生涯を閉じるが、「寿城池の見えるところで」との遺言に基づき、池を見下ろす丘に埋葬された。

その墓を、地元の徐彰教（ソ・チャンギョ）さんの一家が守り続けてきた。父親が水崎さんを一時、居候させていた縁からだ。徐さんは韓日親善交流協会の会長として、水崎さんの業績の顕彰や、日韓交流にも尽くしてきた。

その徐さんが昨年6月、世を去った。生前、「骨を水崎さんのそばに」と繰り返し家族に頼んでいたという。その遺志に従って、徐さんの遺骨の一部が水崎さんの墓のすぐそばに埋められた。

追悼式には、徐さんの次男の徐輔健（ソ・ボゴン）さん（45）の姿があった。父親の思いを継ぎ、韓日親善交流協会の副会長に就いた。大学生の時に日本で2年ほど暮らし、卒業後は韓国にある日系企業に勤めたこともある。今回は父親が亡くなってから初の水崎さんの追悼式だったが、「盛大に行事ができて、天にいる父も喜んでいると思う」と話した。

その徐輔健さんと固く握手を交わす女性がいた。水崎さんのひ孫にあたる岐阜市の小野裕美さん（41）。水崎さんのことは、孫にあたる自分の母親から聞いて育った。徐彰教さんが自分の骨を水崎さんのそばにと望んだ話を聞き、「それぐらい林太郎さんのことを思ってくれていたことが、とてもうれしくて涙が出た」という。

今回は長男の陽平君（10）も連れて来た。最近の日韓関係について小野さんは「大人はなんかぎすぎすしているが、それをまた克服し、仲良くなれたらと思う。こういう場で交流あって、心を通わせていければいいなと思っています」と語った。

追悼式には、日本から細江茂光・岐阜市長や市民交流団体のメンバー、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に日本に連れてこられた陶工の子孫である第15代・沈寿官さんらが参加。別所浩郎・駐韓日本大使も駆けつけた。韓国側からは地元の関係者のほか、呉在熙・元駐

日韓国大使らが参加した。

別所大使は追悼式の後、「本当に素晴らしい日韓友好の国民同士のふれあいに、心から感銘を受けた。国と国との関係は難しいものもあるが、生活に根ざした人と人のふれあいからは、温かいものが出てくる。地方と地方の交流に結びつき、それがさらに国と国に対してもいい影響を及ぼしてくれるのではないかと期待している」と話した。

徐彰教さんから韓日親善交流協会の会長職を引き継いだ李東根（イ・ドンゴン）さん（49）によると、水崎さんの「共生と和合の精神」を今に生かそうと、墓の近くに「国際友好館」を建てる構想もあるという。「韓国と日本が互いに理解し、疎通して力を合わせれば世界平和にも寄与できる。難しい時代からこそ、両国の市民が交流することが重要ではないか」

日韓の市民交流の動きは、これだけではない。江戸時代に続いた日本と朝鮮の「善隣友好」の証しである「朝鮮通信使」の足跡をたどる旅を、日韓の市民らが続けている。

朝鮮通信使は朝鮮王朝が江戸時代に日本に送った外交使節団で、1607年から1811年までに計12回派遣された。使節団は正使以下、約400～500人。沿道は見物人であふれ、各地に漢詩や書、行列絵巻などが残った。

その行程を52日間かけてたどる「21世紀の朝鮮通信使 ソウル―東京 友情ウォーク」（日本ウォーキング協会、韓国体育振興会など主催、朝日新聞社など後援）が1日、ソウルにある朝鮮王朝時代の王宮・景福宮をスタートした。現在、韓国を南下中で、21日に釜山に到着。休養した後、23日に船で日本に渡り、日本での行程が始まる予定だ。

第1回の通信使派遣から400年となる2007年から2年ごとに開催されているこの催しは、今回が5回目となる。今年は日韓の国交正常化から50周年の節目にあたることから、参加者らは50周年を祝う両国共通のロゴが入った旗などを手に第一歩を踏み出した。

今回は特別の参加者がいる。第1回通信使の正使だった呂祐吉の11代目の子孫にあたる呂運俊さん（65）＝ソウル市＝だ。

祖先が朝鮮通信使だったことは知っていたが、この催しは2年前に初めて報道で知った。その時はすでに参加申し込みが締め切られていたため、今回、満を持しての参加となった。家族からは、全行程を歩くと1200キロ近くになるのを心配する声も出たが、「先祖がたどった痕跡を直接、見てみたい」と振り切った。呂祐吉が残した詩の額が静岡県 静岡県の寺に残っており、それを見るのを楽しみにしている。

最近の日韓関係については「政治をする人たちがちゃんとしてくれないと。こんなに近い国なんだから互いに助け合って、ともに繁栄してしていかなければ」と話した。

出発前の前夜祭では、日韓の参加者らが酒を酌み交わし、歌い、踊った。

日韓の国交正常化から50周年の今年に入り、すでに4カ月がたつ。政治レベルでは、高位級の会合が相次ぐなど双方とも対話姿勢は維持しているが、関係の抜本的な改善にはほど遠いのが現状だ。一方で、地に足のついた市民の交流は、政治よりもはるかに先を行っているように思う。これからも、日韓関係を支える市民レベルの動きをきちんと見つめていきたい。

◇

貝瀬秋彦（かいせ・あきひこ） ソウル支局長。1989年入社。大阪社会部、アジア総局（バンコク）、国際報道部次長などを経て2012年1月からソウル勤務。48歳。